

Title	中國中世における印度的なもの
Author(s)	宮川
Citation	東洋史研究 (1947), 10(1): 35-35
Issue Date	1947-12-15
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/145851">https://doi.org/10.14989/145851</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

は軍人が民家の雞を徴發する烈しさを示してゐる。

- ② 古くは魯季氏がコウ氏と雞を闘はせ季はその頭に介せ、著けコウは金距を用ひて勝つたことあり。(呂氏春秋察微) 史記一〇一袁アウ傳に彼が郷里で闘雞走狗を好んだこと、後漢書六四・梁冀傳に、彼が臂鷹・走狗・驅馬・闘雞を好み、兔苑を造り兔を飼つたこと、漢書六二に昌邑王が濟陽市で長鳴雞を得たこと等がある。弋獵狗馬を好まない劉安などは道教趣味にひたり鍊金術などに凝るわけになる。

③ 樓祖詒氏「中國郵驛發達史」等参照。

④ 増井經夫氏「支那技術史に於ける水力問題」(東亞問題十) 同氏「支那の水車」(加藤博士還曆紀念東洋史集説) 魏志二四・韓暨傳・蜀志八・許靖傳(以馬磨自給)

⑤ 後漢書五三竇固傳。同五一・耿純傳。同四六・寇恂傳。(彼は馬二千匹を有する上谷の豪族である)

⑥ 岑封(同四七)が蜀を討つ時は歩兵六萬に對し騎五千足であつた。三國吳になると一部隊の指揮官は兵二千騎五十といふのが定制であつた。(吳志八程普傳等)

⑦ 後漢書四七・吳漢傳。同四九・耿弇傳。同一、光武帝紀等に突騎の活躍が見える。

### 中國中世における印度的なもの

宋書及南史袁粲傳に彼が塞門であるため眞族社會に冷遇されたのを怒り、狂泉國のたとへを引き世相をふらししたことが記される。「ある國に狂泉あり國人はその水を飲み皆發狂し、井水を使用し得たため眞人間であつた國王を却つて狂へりとなし王の病を治すべく荒療治をしたので苦しさにたへず、王も亦狂泉を飲み發狂し君臣共に狂ひ欲然としてくらしした」といふが我も近頃狂ひ水を飲みたくなつたと述べたことある。説話の出典はまだ検出しえないが印度的なにほひかする。搜神記中の印度系説話は既に注意されてゐるが、私の憶んだ中では隋書李敏傳の彼が公主に尙する記事には自選式を思はせるものあり、西陽雜俎には村正の妻の屍に起尸鬼がついた怪話がある。かかる印度説話や風俗の紹介に佛教流傳に伴ふものであらうが、それを受け容れた中國社會に印度的なものが生じてゐたことを注意しよう。六朝身分制の嚴重さは殆んどカースト的なものがあり、カースト制否定の佛教を歓迎し進んで學んだのは塞門であることを考へたら、中國中世の研究には更に東洋史的な廣い視野が必要になると思ふ。

(宮川)